

HSK NPO 法人「文福」ニュース * * * *



「障」ちゃん

* * * * NO.225

冒頭の一言

今年に入って早くも 1 ヶ月が過ぎました。雪がいきなりどかんと降ってきて、いつものこととはいえ、やっぱり道が雪で埋まるとめげますね。雪の上を車椅子で行くのはタイヤが雪にめりこんでにっちもさっちもいなくなったり、車椅子に乗っている側は寒くなる一方で、介助のヘルパーは押しったり引っ張ったり、汗だくになって大変ですが、たまには外出して雪景色の一部になりましょう。長いマフラーを首に巻いて冬のソナタでもやってみて下さい。くれぐれも風邪に気を付けて冬を乗り切りましょう。

—もくじ—

冒頭の一言 … 1	私達 NPO 法人文福は 八木勝自… 2-3	カラオケ大会報告 … 4
お料理の会お知らせ … 5	文福を卒業したその後 … 6-7	kaokao … 8
総会講演議事録 … 9-12	俺の生活 村上隆 … 13	DPI 報告 … 14-15
運営会議報告 … 16	今後の予定 … 17	メール配信 … 18
ありがとう+編集後記 … 20	訂正文 … 19	

「私たち NPO 法人文福は障害者の何を支援しているのか」

NPO 法人文福理事長 八木勝自

この原稿を書いているのが正月お正月ということもあって、理事長を務めさせてもらっている私としては初心に還って、私たちの NPO 法人文福は何を目的にしてどんな支援をしたいのかを書かせてもらいます。

まず NPO 文福は「障害者の社会参加」や「どんな障害者でも地域で生きること」ために障害者の外出や長時間介助を含む居宅介助、介護事業や 1 カ月に 1 回障害者が集まって障害者が社会や身近で起きてくる問題を話したり、解決するための活動を話し合う障害者部会や 2、3 ヶ月に 1 回の割りで色々な人々との交流と社会見学を兼ねたレクリエーション活動や 2 ヶ月に 1 回の割りで様々な所で起きている社会問題とその問題を解決するために取り組んでいる人たちに直に話しなどをしてもらおう学習会などの様々な事業や活動をしています。

では、そのような事業や活動は何故するのでしょうか。もちろん、それは障害者が社会参加や地域で生きるためです。

では、何故私たち NPO 法人文福は障害者が社会参加や地域で生きるために様々な事業や活動をしたり、そのような支援を何故するのでしょうか。それはこのあと、簡単にわかりやすく説明しますが、取り敢えず難しい言葉で言うと、「関係性への支援」ということになると思うのです。

そして、この「関係性への支援」とは何かというと、これまで障害者は重度になればなるほ家や施設に閉じこめられて、家では主に親だけの関係だったり、施設でも施設からは一歩外に出れなく施設職員との関係だけだったりして、社会や人との関係や接点を持てなくなっているのです。

障害者に限らず、人というものは社会で何でも見たり、聞いたり、話したりして成長して人と関わる中で自分を作って行くものです。

社会と関わって、社会や人から影響を受けたり自分が影響を与えたりして自分を作ったり「自分らしさ」や社会での役割を作って行くものなので。障害者はこれまで身体、知的、精神を問わず、重度になればなるほど

そういった社会と人との接点や関係性が奪われ、人としての権利が無くされていた状態だったのです。

私たち NPO 法人文福の事業や活動はその社会や人との「関係性への支援」なのです。

ここで私が言いたいのは、以前の障害者運動や活動はしっかりした自立障害者を作って行く傾向が強かったのですが、人は社会や人や環境からの影響を受けたり、自分の生まれながらの性格も相まって社会での役割や性格を作って行くものなので、「テキトーな人間」や「アイマイな人間」がいても良いと思うのです。(でも、そういった人間や障害者ばかりでも困りませんが。)

大きく言うと、国の厚労省の障害者福祉制度も 2003 年からの「障害者日常生活支援」から始まって、2006 年からは「障害者自立」になってそれから今の「障害者総合支援法」になって、ころころと名前が変わって来ているように見えますが、実は「障害者の日常生活って何だろう」とか「障害者の自立って何だろう」と言う問題意識があって変わって来たのだろうし、そういったことは厚労省が内部で配られている資料にも書かせているそうです。

このように私たち NPO 法人文福の行っている「障害者の社会参加を進める」や「障害者が地域で生きる」ための事業や活動は人間としての当たり前の権利を獲得することであり、それは「関係性への支援」なのです。私たち NPO 法人文福はこれからもこのような障害者の「社会や人への『関係性への支援』」のために頑張っていきたいと思うのです。



「カラオケ大会」の報告

12月16日(土)、「カラオケ」JOYSOUND(ジョイスOUND)富山山室店にて、「カラオケ大会」を行いました。

18時ごろから、長の吉田さんのあいさつに始まり、乾杯をして食事はキムチ鍋やピザなどを食べて、飲み物を何杯もおかわりしながらお話したり、舞台上に上がったりした人もいて思い思いに好きな歌を歌ったりしていました。

最後に長の武田さんの「クリスマス・イブ」で一旦締めまして、その後は夜中までカラオケ大会は続けました。

11名の方々が参加してくださり、各々楽しめたのではないかなーと思っています。

ただ、写真を撮るのを忘れてしまい写真がありません。すみません…。

参加してくださった皆様、ありがとうございました。





「お料理の会」のお知らせ

はじめの、いっぽ

久しぶりに「お料理の会」をやります。(何年ぶりかな?)

今回は、自炊の第一歩、ご飯を炊くところからはじめます。

そしてカレーライスを作りますよー。

みんなで楽しくとっておいしいカレーを作って寒い冬を温まりましょ。

メニューは他に、大根サラダ・デザートを作る予定。

準備から後片づけまでみんなでやります。

自立に向けて、少しずつレパートリーが増えていけばいいな…。

日 時 2月17日〈土〉9:30集合 14:30解散(予定)

場 所 富山市障害者福祉プラザ・調理実習室

参加費 500円(材料費・保険込)

主催・問い合わせ 夢宙人 川添さんまで

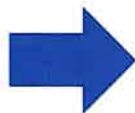
TEL 080-6350-7556

メールアドレス ponko-dapon-@goo.jp

持ち物 エプロン・三角巾・マスク

定 員 10名(先着順)

締 切 2月7日(水)



文福を卒業したその後

文福元アルバイト 大上^{たかし}峻史

大学時代の4年間を、文福でアルバイトとしてお世話になった大上峻史と申します。

文福で夜に働いて、そのお金で昼に遊び、お金がなくなったらとりあえず介護先や事務所にいってご飯にありつくという生活をしていました。なので、文福なしでは今の生活や命がないと言っても過言でないと思います（笑）

そんな僕も中学校教員を始めて1年が経とうとしています。元気の有り余る中学生が相手なので、毎日が戦争です。で、死にかけながら何とかやっています…。ただ、衝突を繰り返しながら子どもと信頼関係を築いていくこの仕事はとてもやりがいがあって、大変ながら楽しい時間を送っています。

文福で働いた経験は卒業した後に、貴重だったと思いました。なぜなら、弱くても声を出すという事を体言していた方々と長い時間一緒にいたからです。

誤解を恐れずに言うならば、障害を持つ人は身体的に弱いです。そのせいで社会的にも弱いと見られます。だから発言権も健常者に比べて弱いです。僕は、立場が弱いならば余計な事は言わないほうがいい、という考えを長い間持っていました。特に中学、高校の時は、スクールカーストにかけてに縛られてやりたいことや言いたいことを十分には言えませんでした。

しかし、文福の方々は弱くとも言いたいことをいいます。おかしいことはおかしいといえます。社会からの不当な扱いには抵抗しています。文福のスタッフはそれを支えることで、社会に抵抗しているようにみえます。それを見て、弱くとも声を出すことは必要な事だと思えることができました。

学校は社会の縮図だと思います。だから生きづらさを抱える子どももいます。また、子どもは大人の姿をみて社会を学びます。ほとんど先生として経験のない、弱い自分が声を出し続けること、無理と言われることに抵抗をすること、そして、その姿を見せ続けることが教育だと思います。このことを文福で学び、自分の血や肉になっています。(えらそうなことを言いましたが、いつも生徒や先輩教諭に負けてばかりです。これから頑張ろうと思います。笑)

最後に、大学生の皆さんにアドバイスです。これは有償ボランティアであって、アルバイトではありません。そんなに他人行儀でいいのでしょうか？自分の家族であったら、もっとずうずうしくしますよね。失礼な事は怒られても、最終的には許されます。だからもっと文福の中の人の懐に飛び込みましょう。学ぶことや感じることもあるはずです。

ではまた事務所におじゃまします。その時はよろしくお願いします。



kaokao のつぶやき No.2



大きい声では言いたくないがいけど、私 kaokao は、今年で3回目の成人式を迎えたがいちゃ！って大きい声で言うてるけどね！(´・ω・｀)

3 回目の成人式というと、『もう人生の終わりやちゃ！』と若い時は思ってたけど、自分がいざ3回目の成人式を迎えてみたらあ、「体力はそれなりに落ちてきているけど、まだまだ気持ちは若いし！やる気もあるがいちゃ！」と感じとんがいちゃね。

知つとる人は知つとると思うけど、私は一昨年の12月から一人暮らしを始めたがよ。

10年程前に一人暮らしはした事はあるけど、その時は親は元気やったし、色々な面で親に頼つとったと思うがいちゃ。

その後8年間は親と暮らしとったから、親に頼っていたと今は感じとる。だから母が病気で倒れ、親を一切頼れない状況での一人暮らし、何もかも自分で決断せんとならん今の状況が本当の意味での自立やと思つとる。

そやから3回目の成人式を迎えた今年が、本当の意味で自立した大人になったがやちゃ！！

精神的な意味でも3回目の成人式を迎えた今年が、私にとって真の成人になったんやと思つとる。

という事で、これから色々な事にチャレンジしていきたいと思つとる。って書くと「kaokao はいったい幾つまで生きる気や！！」と言われそうだが、心配しられんな、そんな長生きしたいとは思とらんから・・・。

まっ、お迎えが来るまでは踏ん張って生きちゃいね。(＃^^＃)

2018年1月 記

文福総会 記念講演報告 その4

京都日本自立生活センター介護コーディネーター渡邊^{わたなべ}さんの講演内容「II. 障害者の地域自立生活のこと」を前号に引き続き掲載します。

施設の職員さんにはお金があるのに、なんで地域で支える人にはお金がないのか。矛盾ですよ。この矛盾のギャップ、今まで完全に埋まってないと思いますけど、その矛盾を埋めるのに本当に本当に何十年にもわたる苦労があったわけです。

もちろんこの辺は、みなさんが身に染みて実感しており、ぼくが言うのもはばかれるところですけども。

地域生活を支えるヘルパーという仕事、重度訪問介護で働くということ、それがようやく形になったのはおそらく2000年ちょっと過ぎてからだと思います。それまでは仕事という感じではむしろなく、ボランティア、コミュニティみたいな部分で介助者は関わってきた。介護料の推移やその辺の詳しい経過とかはぼくの本『介助者たちは、どう生きていくのか』の中で描かせていただいています。

それからさっきの介護保障の図に戻っていただくと、こういう運動の流れの中で、1993年に東京都東久留米市で、24時間介護保障が成立したことが書いています。24時間介護はここから徐々に広まっていきます。2003年に支援費制度が誕生し、このとき、介助時間が制限される危機があったけど、全国的な運動によってそれを阻止し、24時間介護保障の基盤というのが国の制度として整いました。自治体ご

とに差があり、まだ24時間制度のない地域の方が圧倒的に多いですが、それでも、仕組みの上では、24時間介護が可能となっている現在の状況です。

もう一つお伝えしたいのは、当時長時間の介護保障というのは今でいう重度訪問介護ですが、残念ながら身体障害者に限られていました。なぜだか知的障害の方とか、いろいろ行動が不安定で時々パニックになったり、家から飛び出して迷子になって帰って来られなかったり、そういう方については重度訪問介護は認められていませんでした、これもある意味、身体障害者が中心に獲得してきたものなので、そういう意味で言ったら知的障害の人は取り残されてきたということなのかな。

それでも、知的障害者の地域生活を進めないといけないという数少ない人たちの熱意、志によって、ようやく重度訪問介護は2014年度より知的障害者及び精神障害者にも拡大されました。

知的障害者においても、地域社会の中で、長時間見守りで一人暮らしをできるシステム、介助制度を、と訴え続けた方々や支援者がおられ、そういう方々の声が届いて、ようやく重度訪問介護が知的・精神の方にも利用できるようになってきました。

ただこれは実際に使っているところは残念な

がらまだほとんどないと思います。今のところ重度の知的障害があって 24 時間ヘルパーを入れながら暮らす人は、全国的には 100 人いないんじゃないかという感じだと言われています。そのための制度の実態をこれからどう作っていくかとても大きな課題だと思います、先ほどの相模原の事件に対しても同じような課題はあったと思いますけど、これからの各地域での実践がとても大事になっていくのではないかと思います。

●知的障害があり、地域で介助制度を利用して暮らす人達の姿

知的障害があり、地域で一人暮らししている方のことを紹介しようと思って写真を撮ってきました。こちらの方、彼が高校生のころからばくはガイドヘルパーに入っていて 10 年以上関わっているんですけど、身体障害も一級ですが、知的障害も A 判定、一級。数年前に彼の親が事故で怪我をして介護できなくなり、そのまま施設いこうとなりかけたんです。もうこれだけ重くて知的障害もあると、行政も、他の事業所の人もとうてい一人暮らしなんかイメージできずに普通に、ショートステイして、施設暮らしの練習をして、施設に行く、というコースになりかけたんです。でも本人は実はわりと一人暮らしをしたいとつぶやいてまして、ピープルファーストの活動にも関わってて、その中で彼は、自分の夢は 1 人暮らししたいって言ってたこともありました。そういう中で僕ら、ショートを使うくらいなら、体験室で 1 人で暮らしてみる？練習してみない？と言って、親にも、そう

いうことをさせたらどうでしょうという提案もしていきました。

彼の場合、親も、そういう施設へ行くと、彼が無口になってしまう、なにもしゃべらなくなってしまう、意識を遮断してしまう、そんなふうになるんだったら、なんとか地域で暮らし続けてほしい、と言い、できる限りは地域でこれまで通り生きる道を探してやりたい、と協力的だったんですね。これは彼の部屋の写真ですけど、こんな風にできるようになっています。彼自身が僕と一緒に発表することもあるので、ちょっと今日は紹介します。

これは買い物風景ですね。普通に京都市内の街での出来事。

料理作ってるところです。料理作って一緒に飯を食うと。

僕も何百円かお金払ってこんな風に、一緒にご飯を二人分用意して一緒に食べてます。彼は、1 人で食べるより、なんとなく一緒に食べたほうが生き生きしてていいな、というところでこういうスタイルをとってます。

●親に年金使われるのが嫌で一人暮らしした方。

また別の方ですが、ピープルのメンバー、何人か紹介します。支援の量は人によってまちまち、関わり方もまちまちです。

この方、親に年金を使われているのが嫌で、自分で一人暮らしを決めて、今とても生活をエンジョイしています。

親が通帳握って使い込んでたので、それが嫌で 1 人暮らしをしたいとうちに相談して、それで一人暮らしやっていこうとなりました。

彼は日本自立生活センターの身体障害者の家も見学に行ったんですけど、その中で自分もなにかできるんじゃないかという気持ちになった。親とも話し合い、通帳も返してもらいました。毎日一回の支援で済むわけですね。

● 24 時間介護を使う重度知的障害の方の支援

それから別の彼女。いわゆる行動障害があります。彼女はけっこう障害が重たいので 24 時間介護ついています。イライラ・パニックは結構強いので、グループホームの集団生活もなじめず親元に帰ったけど、そこでも苦しい生活してたので、一人暮らしすることになりました。親も協力的で一緒に行政に行政交渉して、24 時間介護を認めさせました。でもお母さんと離れて暮らすことじたいは寂しい。寂しいとき、不安な介助者にかなりきつくあたっています。帰れー！と絶叫したり、手や足が出たり。一人暮らしのしんどさもあるのだと思います。自分で「わたし、よう暮らしてるやろ」と言い聞かせてます。だいたいでかける時はどこいくにも「いややー！」と言います。支援者は一苦勞ですが、でも行ってしまったら大丈夫です。

だから自己決定とかは考えさせられます。「もういやや」っていうとき、その「いやや」をそのまま肯定していたら、ずっと出かけなくなってしまう。行けなかったことの後悔が本人の中に強まりパニックももっと強くなってしまふ。次に出る意欲もますます失ってしまいかねない。新しいことに対する不安の強い方の場合、経験とかも積めないし、どうやって社会とのつながりを作っていくか、単純な自己決定だけでは計

れないものがある。

パーティもしたり、お母さんともほどよい関係で暮らしています。

● 施設でもいいと言ってたけど、施設入所をくいとめ、地域生活を楽しんでる方

次の方は、施設に行きそうになった方。自分では施設でもいい、と言っていた部分もある。普通だったら、この時点で、即、施設入所決定です。施設入所の場合、本人が多少でもイエスと言ったら、そこは都合よく拡大解釈され、本人の心の揺らぎが顧みられることなどなく、施設へのルールが敷き詰められます。でも地域で生活しつづけたいと言ったら、その意向は根ほり葉ほり根拠を探れ、なにかあったらどうするんだ、施設の方が安全なんではないか、入院するときはどうするんだ、誰かたずねてきてだまされたらどうするんだ、火の始末はどうするんだ、などなどあることあらぬことの嫌疑をかけられます。これが、今の社会の実情です。

彼とは、小さなころからのつながりがありました。彼自身は、施設にいったら、生活ややりたいことがどれほど制約されるかのイメージももてていなかった。ぼくら支援者側として、将来どれだけ不利益を被るか、あたりまえの権利が侵害されるか、容易に想像できたので、地域で一人暮らしする道を、みんなに説得してまわりました。自己決定だけでいったら、施設でいいとなっていたかもしれない。ただそうじゃない部分。やっぱりわけ隔てなく地域社会で生きるということを保障しなきゃいけないという思いの中で続けてきました。

彼は、最初は泊まり介護が入ってたんですが、体験宿泊を重ねる中で、泊らなくても大丈夫ということ夜中は介護を抜いてます。

●国の地域移行の目標

最後にお伝えしたいのは、国が、障害者が施設でなく地域で暮らすことにどのくらい力を入れてるか、ということ。

いちおう、理念上では、障害者権利条約や障害者基本法があり、施設でなく地域生活を保障していくという流れはあります。

障害者自立支援法、あるいは総合支援法では、施設入所者の地域移行や施設入所者数削減を進めていくための数値目標を各自治体が計画として定めるようたわれました。だから、それなりに、施設から地域へ、という流れは確かにあります。

10年位前からその計画は立てられているんですけど、10年前の施設入所者の内、3割の方は地域移行しようということで目標が立てられ、確かにそれは実現しました。施設入所者数も10年で一割減らそうという目標があり、それも全国的にみてほぼ達成されました。

地域移行が3割。そこそこの数字ですよ。でもまた新たに入る人がいるので、施設入所者数自体はそんなに変わりません。

出た人は3割ですけど、入ってくる人の数はなかなか減らないです。

施設入所者数が10年で1割減ったということは、単純計算できませんが、施設から全員いなくなるまで、おおざっぱに考えると100年くらいかかるのかなと、ということになります。

100年。それではみんな死んでしまいますね。そんなには待てるわけがない、ということで、今の基本計画とか、数値目標というのはまだまだ不十分な部分あるんだろうなと思います。

あと大きな地域格差も指摘させてもらいます。大都市圏と地方とでは介護保障とかも全然違うというのは皆さんも実感することかと思えます。

一方で活発にテレビとかに出て活動されるかたがたもある一方で、なかなか介護保障も周りにどんな社会資源もない中で、親と一緒にずっと暮らせざるを得ないとか、もう施設行くしかないとかで凸凹間は依然より強まっているかもしれないように思います。

その凸凹な感じは、世間的には、「できる障害者」と「できない障害者」に分断されて見られる可能性もあります。理念をある程度体現できている人がいるのに、他方でそうでない現実を生きざるを得ない人がいるという現状。こういうギャップが、できない人はいない、というような優生思想を生む可能性があることに、危惧しています。



俺の生活

村上 隆

いつかは自立や数人の障害者で暮らしてみたい？

家族もなかなか納得考えられなかった？父親が認知症に俺はどうしたらよいか？7年の月日が流れ、いろいろ周り、友人や知人、幼なじみや考えられなかったけれども、と県外か一人暮らし五艘の市営住宅か。

2017年二月のから申込みして、問題がでてきた。

- ・ 一間口が 65～70 センチ程度だけでも必要な幅は 85 センチ。
- ・ 鍵かけの事でカードキーに変える
- ・ 洗濯機を屋内用の盤や排水溝工事、汚物流し、自立体験中に新たに必要な温水洗浄機能水浄便器。

ということで、五艘市営住宅の場合は莫大なお金が必要になる。

なので、今は他の一軒家や民間のアパートを探している。



第 6 回 D P I 障害者政策討論集会 報告

2017 年 12 月 2 日～3 日に東京で、第 6 回 D P I 障害者政策討論集会が開かれ、文福からも 5 人のスタッフが参加して来ました。

開催テーマは『全てのいのちと尊厳が守られる社会に』(われら自身の声)でした。

私たち文福は 2 日目のみの参加でした。

3 日午前の全体会では、熊谷晋一郎さん(東京大学先端科学技術研究センター准教授)から「暴力をなくすために」という事で、「相模原障害者殺傷事件、二度と繰り返さないために私たちは何をすべきか」をテーマのお話があり、その後、神奈川県で活動されている鈴木治郎さん(神奈川県障害者自立生活支援センター)、小西勉さん(ピープルファースト横浜会長)、女性障害者の視点から藤原久美子さん(自立生活センター神戸 Be すけっと事務局長、D P I 女性障害者ネットワーク代表)から、それぞれご自身の経験を元に沢山の問題提起などのお話をされました。

それらのお話を聴いて私が思い感じたのは、この「相模原障害者殺傷事件」を犯した植松の考えは、まだまだ日本にはびこっている優生思想のなにものでもない！これだけ多くの方が殺傷された事件にもかかわらず、世間から忘れられようとしている現実、私たちは声を出し続けていかねばならないと強く思いました。

午後からは 5 つの分科会があり、私は「障害女性 優生保護法が心と身体に跡(のこ)したモノ～障害女性の視点から」に参加してきました。

この分科会では、司会 藤原久美子さん(自立生活センター神戸 Be すけっと事務局長、D P I 女性障害者ネットワーク代表)、基調報告 米津知子さん

(SoshïREN ^{わたし}女のからだから、D P I 女性障害者ネットワーク)、パネリスト

佐藤路子さん(仮名、優生手術被害者家族)、南雲君江さん(D P I 女性障害者ネットワーク)、川合千那未さん(D P I 女性障害者ネットワーク)が、個々の立場から興味深いお話をしてくださいました。

私が一番興味深く聴き入ったのは、佐藤路子さんが話された知的障害の義妹さん(60 歳)の事例と、それに基づく、義姉としての佐藤さんの熱い想い、

旧優生保護法のもと、知的障害を理由に義妹さん本人に何の説明も同意もなく 15 歳で不妊手術をされた報告でした。

この義妹さんは幼い頃の麻酔治療の後遺症で知的障害が残ったそうです。

その知的障害だからという理由でか、本人に詳しい説明もなく不妊手術を受けさせられたとの事、優生保護法の下で手術するにあたり、台帳には、『遺伝性精神薄弱』を理由に、15 歳で卵管を縛る処置を施された記録があったそうです。

「親族に障害のある人はいないのに『遺伝性精神薄弱』と書かれていた。」との事、それは「手術するために『遺伝性』という病名をつけたのではないか。納得できない」と訴えておられました。

義妹さんの腹部には大きな手術の跡が今も残っているそうです。「若い女性なのだから手術の跡は最小限にするのが、医療側としての当然の配慮ではないのか！犬や猫の避妊手術でさえ傷跡を目立たなくする！」と語っておられました。義妹さんは手術後、頻繁に腹痛を訴えられ、30 歳前には手術で癒着した卵巣を摘出されたそうです。

縁談もあったそうですが、子どもを産めないことを理由にその縁談は流れたそうです。義姉の佐藤さんは「義妹が受けた強制不妊手術は残酷で人権無視以外の何ものでもない。」と話されていました。私は「本当にそうだ！人権無視以外の何ものでもない！」と怒りと悲しさが入り混じった思いで聴いていました。

ちょっと思ったのですが、佐藤路子(義姉)さんは本当に義妹さんの事を思い、闘っておいでになるのは素晴らしいなあ。と思うと同時に、当事者である義妹さんは、この事をどのように感じ、どのように思っておられるのか、少し難しいのかもしれませんが聴いてみたいと私は思いました。そして、「これらの事も私たち障害者女性として、声を出し続けていかねばいけない。」と強く思いました。他にも沢山のお話を聴いてきましたが、私の報告はこれで終わります。

文責 中村 薫

運営会議報告 2017,12,19

【障害者部会】

東京での DPI 会議に部会から 2 名参加しました。
ニュースで報告があります。

【派遣事業部】

新規アルバイト男性 3 名入りました。

【レクリエーション】

1 月 20 日（土）餅つき大会 つき始め 11 時 終了 16 時予定。
場所：文福事務所

【障ちゃんニュース】

12 月 24 日（日）印刷予定 26（火）発送予定。

【まっち】

12 月中、原稿募集。1 月発行予定。

- 新年会について
2 月 24 日（土）に変更。
- アルバイト募集ビラ入れ報告
手まき 300 枚、新聞折り込み 2330 枚終了。
- 来年度の総会について
障害者部会で検討します。
- 次回運営会議 1 月 23 日（火）

報告者 広田



◆今後の予定◆

このコーナーでは、文福と他団体の今後のお知らせを載せていきますので、チェックして、たくさんの方々にお越し頂ければと思います。よろしくお願いします。

◎ **お料理の会 はじめのいっぽ**

日時 2月17日(土) 9:30集合 14:30解散(予定)

場所 富山市障害者福祉プラザ・調理実習室

参加費 500円(材料費・保険込)

主催・問い合わせ 夢宙人 川添さんまで

TEL 080-6350-7556

メールアドレス ponko-dapon@goo.jp

詳しいことは5ページを見てくださいね。

◎ **第8回地域福祉フォーラム in TOYAMA**

日時 3月3日(土) 9:30受付 10:00開演 17:00終了

場所 富山県高岡文化ホール 1階多目的ホール

(高岡市中川園町13-1)

参加費 4,000円(学生は無料です。)

主催・問い合わせ とやま地域福祉ネットワーク事務局

NPO法人 くるみ 坂下さんまで

TEL (0766) 54-0465

メールアドレス genkidasouzetfn@gmail.com

◎ **ポッチャDEであそぼっちゃ!**

日時 3月24日(土) 13:00から17:00

場所 富山市障害者福祉プラザ・多目的ホール

参加費 100円

主催・問い合わせ 夢宙人 **TEL** (076) 441-6106

メールアドレス muchu.jin.55@gmail.com

持ち物 内履き・タオル・飲み物など

締切 3月12日(月)

詳しいことは次号に掲載します。

ニュースの視覚障害者の方へのメール配信再開のお知らせ

この度、一旦お休みしていた視覚障害者の方へのニュースのメール配信を再開しようということになりました。

文福の月刊誌、「障」ちゃんニュースを紙媒体ではなく、メールにて配信する形となります。ご希望の方がおられましたら、下記までご連絡下さい。

前回メール配信をさせていただいていた方も改めて連絡をいただけたら幸いです。

このメール配信を通じて、より多くの方々に文福のことを知ってもらい、様々な情報を発信していきたいと考えています。またこれが、今の形だけではなく、違った方法での発信を模索するきっかけになっていければと考えています。

今後とも「障」ちゃんニュース」を宜しくお願い致します。

問い合わせ・連絡先

NPO法人 文福

〒930-0887 富山市五福3734-3

e-mail: bunpuku@arrow.ocn.ne.jp

HP: <http://bunpuku.org/>

TEL/FAX (076) 441-6106



お詫び

前号の日下さんの記事「優性？顕性？」にて、こちらの編集ミスで文章を一部載せていませんでした。訂正箇所を下記に記します。

●間違い

この問題は、障害者ことに生まれつきを始めとする幼い頃からの障害者にとって大変重要なておきます

●訂正

この問題は、障害者ことに生まれつきを始めとする幼い頃からの障害者にとって大変重要な問題であると言う事を蛇足ながら記しておきます。



ありがとう&編集後記コーナー

★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

今後よろしくお願ひします。

★☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

雪が降ってとけた頃に、また雪がどっさり積もるといふ展開ですが、いかがお過ごでしょうか？

もうすぐ冬のオリンピックが始まりますね。冬にしかできないスポーツもあつたりして、お目当ての選手や種目に目をクギづけにして熱戦を楽しんでみてはいかがでしょう？

カンパ

安本 栄二さま 松田 成美さま

物品提供

居石 真理さま 安本 栄二さま 渡辺 明子さま 能登 泰子さま
川淵さま 田中 直美さま 石坂 優子さま 鈴木 美明子さま
高井 弘子さま

発行人：北陸障害者定期刊行物協会 富山市今泉 3 1 2

ぶんぷく

編集人：特定非営利活動法人 文福

〒930-0887 富山市五福 3734-3

e-mail:bunpuku@arrow.ocn.ne.jp

HP: http://bunpuku.org/

TEL/FAX (076) 4 4 1 - 6 1 0 6

定 価 50円

※文福の会員の方は、会費に購読料を含んでいます。